冬の橋

芝木好子

冬の椿

芝木好子

講談社版

冬の椿

昭和四十五年二月二十四日　第一刷発行
昭和四十五年六月二十八日　第二刷発行
著　者　芝木好子
発行者　野間省一
発行所　株式会社講談社／東京都文京区音羽二―一二―二一
郵便番号　一一二
電話東京（九四二）一一一一（大代表）／振替東京三九三〇
印刷所　信毎書籍印刷株式会社
製本所　黒柳製本株式会社
定　価　六四〇円

©芝木好子　昭和四十五年　落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。

Printed in Japan

0093-123790-2253 (0)　（文1）

長篇　冬の椿　目次

鎌倉の家　5
女身　55
渦の中　140
たまゆら　176
七年の後　199
冬の旅　281

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.co

冬の椿

装幀　高橋忠弥

鎌倉の家

鎌倉の谷戸のなかに手頃な家を見つけて笹田香澄とその母のたけ子が移ってきたのは、昭和十九年のはじめであった。軀のあまり丈夫でない初老のたけ子には谷戸の風はやはり身にしみた。その年の冬は、燃料も食糧も乏しくなっているせいで、ひとしお寒気がこたえるのであった。けれど東京からあまり遠くない鎌倉に疎開をかねた家を持つことが出来て、たけ子はよろこんでいた。東京は空襲を取沙汰されていたし、香澄を本郷の家へおきたくないわけもあって、少しくらいの寒さや不便を忍ぶのはやむを得なかった。

疎開の荷物も片付いたので、二人で庭へ出てみると、この家の持主が手入れを怠ったせいか建仁寺垣も枝折戸も痛んで、木の下枝もむさくるしくなっていた。

「香澄さん、少しずつお庭を片付けないといけないわ。お隣りをごらんなさい、この時節になんというお手入れでしょう」

たけ子は隣家の広々と植込みの美しい庭を垣根越しに見ていた。香澄は冬陽の下で落葉を

掻きあつめながら、あんなに手入れが届くのは軍需景気の人間の住む家に違いないと思った。

「山の中へ来たのですもの、お庭も自然のままがいいと思うわ。どうせ木の下では畑にするわけにもいかないし」

借りた家の植木を勝手に切ることは出来ないが、谷戸の細い道のわきにひっそりと建った小さな家を、香澄は気に入っていた。買物は自転車に乗って下の町までゆかなければならないが、これまで見たこともない自然のよさや、風情があった。庭の繁みのかげに寒椿の咲くのを見た時も、ああきれい、と彼女は思った。真紅の花弁のぽったりした三分咲きの椿は寒さに堪えて、初々しい羞じらいを含んでいた。彼女は画帖を持ってきて立ったまま写生をはじめたが、こんな気分は久しぶりのことであった。

「箒を放り出して、のんきな人ね」

たけ子は娘のすることをあきれて眺めていた。娘は女子美術へ通わせたが、絵描きになるには並々ならぬ勉強がいったし、早く良い結婚をしてくれることが望ましかった。椿の絵を描いても、差しあたってお腹がふくれるわけでもない。配給の食糧では日がな一日乏しい思いをしていなければならなかったし、亡くなった良人の遺産で暮らしているたけ子には闇の食べものを自由に買うわけにもいかなかった。

表の門が開いたので、香澄は画帖を持ったまま枝折戸から顔を出した。見馴れない二十

八、九歳の瀟洒な男がフラノの服を着て立っていた。
「隣りの瀬木です」
おだやかに微笑をうかべて会釈した。引っ越してきた翌日、たけ子は隣家へ挨拶をすましたはずであったから、香澄も会釈を返した。
「今日の午後、お暇でしたら、母がお近づきのしるしにお茶を差し上げたいと言っていますが」
不意に現われた青年なので香澄はまじまじと仰いでいたが、相手の挨拶に気付くと、あわてて母を呼び立てた。たけ子は狭い庭の中で口上をあまさず聞いていたので、すぐ姿を見せた。
「御丁寧なお招きで、恐れ入ります。お言葉に甘えて伺わせていただきます」
「お揃いでおいで下さい、お待ちしています」
育ちのよさの感じられる青年は、一礼して去っていった。あとを見送ると、たけ子は娘をうながして座敷へ上がった。彼女はズボンに厚手のセーターを着た娘の無造作な恰好をつくづく眺めた。
「着物を着て伺わなければいけませんよ。どれが良いか出してごらん」
「なぜ、このままではいけないの」
「あちらはお茶室へ招んで下さるのよ、ズボンで坐れますか」

「この非常時に、警報が鳴ったらどうするの」
わざとおもしろがって香澄は言った。長い袂の着物を着て外出することはほとんどない日常であった。たけ子はかまわずに箪笥を開けて吟味する。娘の嫁入りのために買い溜めておいたきものが幾枚かあった。その中から紺結城のきものを選んで、それに似合うローズ色の袋帯を揃えると、絶えてない着物のよろこびをたけ子は感じた。この支度に香澄はおどろいて、
「ずいぶん大袈裟ね、改まって伺うのは窮屈だわ」
「この御近所に知合いは一軒もないのよ、親しくしていただければ結構じゃありませんか」
娘のぐずぐずいうのを、相手にしなかった。隣家は静かな暮しで、未亡人と息子だけということをたけ子は挨拶に行ったとき聞いていた。あちらはひっそりしているが、こちらは親子で喋るから、香澄の若い女らしい声は届いているかもしれなかった。
午後になって、たけ子と香澄は瀬木家を訪れた。老婢が出てきて案内されたのは庭の一隅の茶室であった。たけ子の思ったとおりの扱いで、茶の間の気さくな語らいとは違っている。にじり口に先程の青年が迎えに出ていて、二人は上客らしく丁寧に通された。この家の女主人は痩せた色白の老女で、若い時はどんなに美しかったろうと思わせる、端正な面ざしのひとであった。息子の母親としては老けていたから、末の子供に違いないと香澄は思った。挨拶は鄭重に交された。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「おきれいなお嬢さまでいらっしゃいますね。お絵をお描きになるとか」
瀬木夫人は香澄に目を止めた。
「油絵を少し習わせましたが、御時節ですからのんきにしてもいられません」
とたけ子は言いつくろった。戦争の最中に絵をたしなんだところで役にも立たない。丈夫な肉体を持って欠乏に堪えてゆく女性がよろこばれた。
「世の中がかさかさしていますから、御趣味のあるのは結構ですわ。私なども時たまここでお茶をたのしむのが、たった一つの生き甲斐でございます」
瀬木夫人は良人を三年前に亡くして、あとに残った商事会社を息子が継いでいると話した。
「お若いのに、御立派でございますね」
「いえ、親の七光でございます。大学生の時分に胸をやりまして、兵役も免かれておりますし、苦労知らずで」
静かに息子をみやるこの母と息子はおっとりした表情も似ていた。たけ子も亡くなった良人が大学の教師であったことや、長男は会社員で、若夫婦して本郷に残っていることなどを告げた。狭い茶室の釜は鳴って、午後の陽が障子に庭の木立をうつしている。香澄は退屈して、床を眺めた。寒椿が古九谷の壺に挿してある。庭先にはつくばいがあって、植込みも美しい。やがて夫人の点前がはじまると、松籟の音も静かな一ときであった。疎開さわぎで荷物に追われたこの頃のあわただしさが嘘のような、浮世放れのしたやすらかな時間であった。

香澄は目の前におかれた菓子器の上等の菓子にも、久しぶりに対面した気がした。小さな練きりを懐紙にとって、上品に食べるために節約して口に運んだ。上質の砂糖の甘さは舌に溶けて、ほんのりやわらいだ。束の間の贅沢を味わいながら、気がつくと、青年がじっとこちらに視線をそそいでいる。

「結構なお点前でございます」

と主客のたけ子は、夫人の点てた薄茶の茶碗を両手に持って飲み干した。そのあとに、香澄も淡みどりの薄茶の一服を口にした。青年はまた彼女の顔に目をそそいでいた。なにも不思議なことはない、茶室でお互いの動作を見守るのは、むしろ礼儀であった。そのあとで彼自身も作法通りに茶を干した。

「龍彦さん、うちにある画集をお嬢さまにお目にかけては」

点前を終えて寛ぐと、夫人は息子をうながした。

「ろくなものはありませんよ。でもよかったら今度揃えておきましょう」

「どんな画家のでございますか」

香澄は訊ねて、彼の父が外遊の折に買い求めてきた近代画家のものと知ると、興味を覚えた。若い二人が語らうわきで、母親たちは戦争のなりゆきの不安や、物資の不足や、空襲の噂などを話しあっていた。たけ子の抱く不安は生活の不安定にもつながっていたが、瀬木夫人は物静かさを乱すことはなかった。

「裏庭に少しばかり菜園がございます。春には野菜を作りますから、お宅も御一緒にいかがですか。私どもは少ない人数で、手もまわりませんので」

「それは、ありがたいことでございます」

たけ子は感激のおもいを隠すことが出来なかった。物資の乏しくなった世の中で、すべて配給に頼る生活では、自分の手でいくらかでも補わなければならなかった。人はみな自分の食糧を守ることに必死になっているのに、畑を使わしてくれる人間が現われようとは、救いの神と言わなければなるまい。たけ子はこの時代に落着いて暮らしていられる人たちを、不思議にさえ感じた。

「たのしい時間を過ごさせていただきました」

そろそろ辞去する時がきたので、たけ子は夫人にも瀬木龍彦にも礼を述べた。

「僕こそ助かりました。いつも休日は母の相手をさせられて、閉口していましたから」

瀬木は快活に、人あたりもやわらかく答えて、香澄にもまた画集を見にきてほしいと言った。庭へ出ると、植込みの中にめずらしい蠟梅が清楚な花をつけているのを、たけ子は娘に指さした。

「匂やかなお花でございますね。せわしなく暮らしておりましたので、花の美しさを眺める暇もございませんでした」

「私などもお寒い間は、庭先へも出ませんのですよ」

夫人は隣人を得たことをよろこんで、息子から客人へ紙包の土産物を贈らせた。たけ子と香澄は庭をまわって表門へ出るために、堅牢な防空壕のわきを通った。

「しっかりした壕が出来ておりますね」

「お宅は？」

と瀬木は訊ねた。

「これから壊れかけた防空壕を直さなければなりません」

「この防空壕は広いのです。よかったら利用しませんか。塀の一部を通路にすればすみます」

「それは御親切に」

たけ子は思いがけない申し出に、幾度も腰をかがめて礼を述べた。瀬木に送られて門を出ると、たけ子と香澄はわが家へ戻った。たけ子にとって夢のような一ときであった。香澄は母の感激を一緒に味わうほど隣家に馴れていなかった。

「窮屈だったわねえ、足がしびれちゃった。その紙包はなあに」

娘の出した手を、たけ子はぴしゃりと叩いた。これから上品な隣人とつきあってゆくために娘の行儀を直さなければならなかったし、我儘もゆるさないつもりであった。さびしい鎌倉の谷戸へきてどうなることかと思った生活に、光を受けた心地がした。願わくは隣家の人人に娘も気に入ってもらいたかった。

「上品な奥さまと立派な御子息ね。あんな孝行な方はめったにいませんよ」

「そういえば、よく似ていたわね。私二人の顔を見比べて、原型は同じだと思ったの」

香澄はわざと母の眉を顰めるような口を利いた。まるで見合かなにかのように若い男と女が向かい合って、それぞれの親のつきそっている図を、彼女は好まなかった。たけ子が幸福な未来を描くような顔をしていると、そんな夢は早く捨ててほしいと思った。現実の生活はきびしくて、あの茶室にあった安らぎは嘘のような一ときに過ぎない。それよりもさっきから気になっていた紙包をあけてみると、茶席でいただいた上等の和菓子だったので、香澄は声をあげた。隣家の気前のよさだけは認めないわけにゆかなかった。

鎌倉から東京へ出るのは、引っ越して以来初めてであった。香澄は朝からそわそわしてたけ子の頼む用事も上の空に聞いていた。出がけにたけ子は門まで送りに出て、

「お夕飯までに帰っていらっしゃいよ」

そう念を押したが、いま山から下りてゆく香澄は自由感で一杯で、帰りのことなど考えていなかった。母や兄がどうして急に彼女を鎌倉に住まわせたか、そのわけも分かっていたが、考えたくなかった。二十四にもなった娘の意志を変えさせられると思うのだろうか。彼女は今日も画帖を抱えて出てきた。山を下りたバス通りの停留所は誰も立っていない。一日に三往復しかしないバスに乗りおくれては大変である。彼女は腕時計を耳に当てて、止まっ

ているかどうか確かめた。
目の前に自動車が行き過ぎて、急に停まった。うしろの席から見覚えのある男が顔を出したと思うと、瀬木龍彦であった。
「どちらへ？」
「駅まで。東京へまいりますの」
「乗りませんか」
彼は無造作に言ったので、香澄はその気になった。バスに乗り遅れていたら、駅まで歩くのはたいへんであった。車は彼女を乗せて走った。ほっとする、今どき車を使える人間は少ない、この若さで、と彼女は瀬木を珍しい人種に感じた。彼もこの車で駅までゆくのであった。東京まで通して乗ることもあったが、木炭車に揺られるのも時間がかかるらしかった。車は真直ぐに駅へ向かって広場の端に停められた。出征兵を見送る一団が広場の中央を埋めているからであった。この光景はいつも香澄の心を翳らせた。兵役に関係のない若い男はめったにいないし、それはまた女性につながる問題であった。電車は混雑する出勤時間をそれていたが、台数が少ないせいか席を取るのはやっとであった。電車が走り出すと、香澄は先日の招待の礼を述べて、母がよろこんでいることも告げた。
「久しぶりに平和な気分を味わいましたの、珍しいことでしたわ」
「そうですか。今度はあなたにお茶を点てて頂きたい、と母が言っていました」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com